
遠き宇宙の青き星

黄色い鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠き宇宙の青き星

【Nコード】

N5233H

【作者名】

黄色い鳥

【あらすじ】

「新天地を探す」新たなる安住の地は人類を求めている。卓越した技術はやがて人類の夢を託すアンドロイド”ブルーアース”を創り出し無限大に広がり続ける宇宙の海へ船を送り出したのであった。

「一章 夢の星」

「表面に水成分確認、惑星を捕捉します、大気圏に突入着水まで残り60秒」

カプセルの中に数百年振りに電子音声が響き渡る、カプセルは徐々に加速し表面が熱に包まれさながら流星の様だ。

大気圏に突入し迎え入れるは何処までも続く青き海、

「3000m2000m1000m…着水します、長旅お疲れ様でした」

ザバン！とカプセルが海面を割り、穏やかな海面を揺らしやがて静寂が戻った。

「スリープモードを解除、ヘッドステータス異常無し、外装異常無し、内部パーツ損傷無し、コード：ブルーアース起動します」

全ての安全装置が解除され立ち上がるそれは生物では無い、次世代型アンドロイドだ。

ボディは白を基調に間接部分が紫で塗装されたシンプルな配色、人間の構造をベースに造られており指を使い細かい操作が出来るほか人間でいう脚となる部分は爪先が三本の鍵爪となり猛禽類を彷彿させる作りだ。

頭部は円柱の頭頂部をぐるっと一周凹凸が続くデザイン、彼のいた星で有るもので表すとしたらチェスの駒、ルークと言った方が分かりやすいであろう。

透視、暗視、倍率可変が可能なスキャンバイザーも搭載し正に死角無しと言った所。

彼の半永久機関を動かすエネルギーソースは「水」

積み重ねた全ての機器は水を得ることによって機能する、

彼のいた星ではもつとも人類に近いアンドロイドとして人権を与えられるに至った。

それも今から数百年前、彼のログには415年前。

銀河旅行に飽きが来はじめた人類達は一つの狭き銀河から無限の宇宙に広がる銀河に夢を抱く、未だ人に適正を持つ星は見付からぬ人類はとある計画に夢を託す。

水を糧に半永久的に稼働するアンドロイドに最先端技術を詰め込み惑星探索型の、人類の夢を載せたハイブリッド。

それが『ブルーアース』

そして夢はついに現実となる。

屋外をスキャン開始、安全を確認。

最後のログは415年前を指している、外は青い、海？私は着いたのか。

途中小惑星群により宇宙船が損壊し、渡航ログは残っていない、私は宇宙の何処にいるのか、想像もつかない。

救いと言えばここに水があるという事だ、カプセル内に通信用端末『ブルースフィア』もある。

まずは探索だ、必要な荷物を下ろしたら探索を開始する。カプセル内は広く、母星の一般的家屋が丸ごと入ってしまう広さだ。

構造は三階層に別れていてマザーコンピューター兼通信端末のブルースフィアがセキュリティ、宇宙空間の移動、掃除、整頓、機器の管理を全てを行っている。

ブルースフィアもまた自律性の機械であり名前の通り青い球体、僅かながら鈍い光で球面を覆っているそれはオゾン層を表しているのか、機械だが美しさは正に宝石。

携帯の際には左腕の隔離された次元の収納スペース、エネストミースペースの中に収納され必要なデータはホログラムで表示される。よし、準備はこんな所でもいいか。

「私を忘れてますよ」

「と、すまない」

ブルースフィアは忘れられていたのが不服だった様で振動をして感情表現を行っている。

ブルースフィアは使えば使う程持ち主に合った機能のロツクを解除する、人間で表すと心を通わせる、とマニュアルにある。

人間か、私は人間にもっとも近いアンドロイドだけあって物忘れもするというとか、なんて非効率な機能を付けたのだ制作者は。

私はブルースフィアをエネストミースペースに収納しもう戻ることも無いカプセルを出て惑星の生命の源、太陽を見た、やはり母星と環境が酷似している、空気の成分はやや酸素の割合が多い、がしかし人が住むには問題が無いだろう。

私の視線が次に向いたのは透明度が母星ではあり得ない程高い海と数十メートルはある巨大な生物であった。

カプセルから北へ2kmの地点にブルーアースはいた、だが先程までの姿とは違う、

数時間経過し環境に適応した形に姿を変え今は母星に存在していたイルカと呼ばれている

海獣の姿とよく似た形へと変形を行った。

イルカは高周波のパルス音を発してコミュニケーションを取る事が知られている、

だがこの付近にはイルカは存在しないことは明らかだった、声が返ってこないのだ。

パルス音の利用方法はそれだけでは無い、物体に反射した音から物体の細かい特徴、位置までも把握出来る。

超音波の振動からするとこの辺りの海は、高さ5mはあろう珊瑚が海中を覆っているのが分かる、

透き通ったサファイアの様な海に彩り鮮やかかつ聳え立つ珊瑚の大きさがこの星のスケールその物を

表してるかのようなそんな気がしてならないとブルーアースは人工知能の片隅に記録をしていた。

そう純粋な自然は雄大で繊細、人に手を加えられた仮初の自然とは訳が違う。

ブルーアースが見た母性の海は既に海ではなく他の何かだったに

違いない、これこそが海だ

母星にいる人間達がまだ見たことの無い、いや彼ら彼女らが幻想を抱いている美しい海はこれに違いない。

「現深度12m、水中透視度78m、視界は極めて良好です」
ブルースファイアの計測情報が3Dホログラム化され目前に映される。

「透き通りすぎて怖いくらいだ」

果たしてこの星は海だけで陸地は無いものなのか、これでは移住したとしても土地が無い、

ブルーアースは一度海中の搜索を打ち切り一度海面へと上がり再び姿を変える、飛翔する為に。

ボディパーツに付着した海水と付近の海水が一瞬で吸収されると再び着水時の鷹形態へと一瞬全てが原子レベルまで分解され再構成される。

ブルーアースは環境に適応し少しずつ姿を変えるのが基本だが、一瞬で姿を変えることも容易である。

ただし無条件という訳でも無い、その際大量の水を消費し24時間1回の使用が限界だ、
限界を超えた変形は予測の付かない方向へと向かうとされている、
ブルーアース自身その限界の先を知らない。

翼を広げた白銀の鷹は飛翔する、雲ひとつ無い澄んだ青空に吸い込まれる鷹は上昇しやがて安定し滑空し

空を行きかう未知の空の旅人と共に向かうべき場所へ翼を進める。

奇妙な形だ、爬虫類とも言いがたい皮膚に建築材料の鉄筋より固そうな一本の脚に円錐の鋭く

細長いクチバシ、翼は2枚に背ビレも存在する。

「該当する生物は未確認生物です、母星に該当する生物の存在は確認出来ません。」

体長は2m強で視界範囲内に86羽確認出来ます」

「この生き物は海に住んでいる・・・訳では無さそうだな、後を追えば住処の陸地にたどり着けるかもしれない、どう思うブルースフィア？」

「っな!？」

答えを聞く暇も無く86羽は急降下を始めた!ほぼ垂直に近い「まさか・・・このまま!」

群れの先頭に固定し追従していたブルーアースは群れと共に海面に向かっている、母星の鳥ではこの急降下の速度の圧力に耐えられる鳥は存在しない、いやこの生物は鳥なのかも怪しい所だ

「緊急解除」

ブルースフィアの声と共にロックが解除され群れの呪縛から解き放たれがなおも落ちていく生物の群れををすぐさま拡大し確認すると潜った。

まさに海鳥が魚を獲る時のそれだ、だがそれだけでは無い!

海面を跳ねて移動し逃げる魚の群れを追っている、

何羽かはその円錐状のクチバシに何匹も魚を突き刺しているのが見えた。

「私が最初に見つけたのだから、あの生物の名前は私が決めよう」

彼の脳内データベースに新たな情報が追加された。

「新たに楽園にて発見した生物 ツキサシウオ」

獲物を捕ったハンター達は海上を低空飛行した後に ヒナ達が待つ巣へ向かう、ブルーアースの目測は見事に外れた、ツキサシウオが向かったのは地上では無い、樹上だ。

母星に昔マングローブと言う植物が生息していたのを思い出した、だがこれは…海面から先まで300m、巨木、余りに巨木。

低空飛行から急上昇し巣へと向かう、その時だった私は見た、海

面に突如現れた黒い影が海面から姿を現し牙を剥きツキサシウオの群れに襲い掛かるのを。

群れは四散した、群れを襲撃する敵は再び海中へ深く潜り姿を隠す。

「ブルースファイア！目標の計測を頼む！」

母星で当時最新技術の隅々を使い製造されたスキャンバイザーが姿を捉えきれないとは、そしてあの攻撃性、恐らくこの海の食物連鎖の頂点に君臨するに違いない。

「計測終了、目標は海中247mまで潜水し留まっています、全体のスキャン完了目標の3Dモデルを展開します」

「な、なんだこれは…」

ウツボの様な首二つに頭より太い尾が二本、尾を旋回させ海中を高速で移動し海上にいるツキサシウオを襲っていた訳か。

「来ます」

二つの黒い影が再び現れる、狙いはツキサシウオでは無い、私だ！

白く輝く鋭利な牙が見えた、四時の方向、速い！

風圧で羽が切り裂かれた、運良く回避は出来たものの気を抜けば一瞬で食らい付かれてしまうだろう。

下手に逃げ回るともう一本に隙を見せてしまうことになる、ならば、

「目標を破壊する」

次に牙が見えた時が貴様の最後、私を狙ったのが運のツキだ、

白銀の鷹は翼を広げて待ち構える、双頭の君臨者は動きを止めた獲物の息の根を止めようと挟みこむ様に一閃！

一秒にも満たない短い時間の間光が走った、そして二つの頭ブルーアースのほんの数m前で動きを止め綺麗に縦に割れて鮮血のシャワーを吹き出しながら海へと力を無く落ちていく、海は赤く染まった。

四散したツキサシウオは辺りにはもう居なかった、無事逃げ切ったのだろうか、しかし、彼のログは此処までだ。

その数秒後ブルーアースは突然まっ逆さまに海へと転落、水死体の如く海上を漂う、

ブルースフィアは暫く時間を置きエネストミースペースを展開すると動かなくなった彼を一時的に収納し巨木群の陰へと身を隠すことにした

「ブルーアース再起動。」

陽は既に沈み切っており、明かりを発する物が無い海は闇に包まれている、ブルーアースはスキャンバイザーの機能を暗視モードへ移行させた。

自らを構成している水分を解離させダイヤモンドでさえ切り裂く水の刃として発射した為に

私の体を構成している水分が減少しプログラムに異常をきたし一時的にシャットダウンしたということか、

下が海で無ければどうなっていたのか考えるだけでも恐ろしい。

「これは・・・?」

ブルースフィアの周りに忙しく数多くの3Dホログラムが表示されては消えるを繰り返している。

「一日で得たデータを纏めて解析をしている所です、少々お待ち下さい、それと」

「それと?」

「私が動かなくなったあなたをエネストミースペースに入れておいたことも少しは評価して下さい」

「すまない」

「なぜ謝るのですか?あなたは全力を尽くした、非はありません、

もし人間だったらこう言うでしょう”ありがとう”と”

ありがとう 感謝の意、データベースにはあったものの母星にいる間は一度も使うことは無かった言葉、

私は始めてこの単語を使う。

「ありがとう」

人間、か、私は人間と喋ったことは無い、極めて人間に近い構造を持つこのボディ、喋ることは補助的な機能であって人間と喋る為に作られた機能では無いのは分かる、これはブルースフィアとの連携を取る為、それだけの機能、なぜだろうか、今になって人と話したいという気持ちになるというのは、いや、この気持ちという概念自体がプログラムなのか？違う！私は一人のアンドロイドだ。

いつか、いつか母星に戻った暁には人権を持つ唯一のアンドロイド種として人間と同じ様に暮らしてみたい。

「解析終了、結果をお聞きになりますか？」

「勿論」

「まずはこのデータをご覧下さい」

ブルースフィアの青い表面に母星最新版の星座図が表示され、その解説が始まった。

「ここは、夏のホノルルの夜空・・・此処と何の関係が？」

「私達の真上に広がる星空とホログラムの星空見比べてみてください」

そう言われてブルーアースは夜空を見上げた、まず見たのは北北東の空、スキャンバイザーに写された夜空は脳内データベースと照合され名前が表示された。

「・・・馬鹿なツ！そんなことありえない！」

「事実です」

ペガサス、うお、アンドロメダ、とかげ、この組み合わせは秋の大四辺形の星座、此処は地球だったのか！

この生態系の変化、気候の変化、地形の変化、私が出発してから数万年、

いや、数十万年経ってるかもしれない。

我々に願いを託して送り出した人類は生き延びているのか、それが早く、人類の安否を私は早急に知りたくなった。

「ここがホノルルならば太平洋の真ん中辺りのはず、東へ向かえばアメリカ合衆国へ行くことが出来る！・・・そういえばブルースファイア」

「はい？」

「あなたは何も見ていないのかな？宇宙船の管理はあなたがしていたはずだ」

「私は小惑星群との衝突以来あなたに再起動されるまで動作が出来なかつたので残念ながら」

「そうか・・・よし、ならば自分の目で確かめるまでだ！」

環境汚染の危機にあった地球の劇的な変化、人類の安否、知るべきことは夜空に浮かぶ星の如く多い、

二つの”青”は青き星を闊歩する、その先に悲しみが待ち受けていようと、何があるようと、その歩みが止まることは無い。

「一章 夢の星」(後書き)

初投稿です、頑張って完結させたいです。

感想などがありましたらお気軽に書き込んで頂けるとこちらとしても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5233h/>

遠き宇宙の青き星

2010年10月28日03時56分発行